



Title	シェンキエヴィチの『炎と剣』における「クレスィ」の植民地的想像力
Author(s)	シモムラ, アンナ
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2026, 59, p. 25-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104560
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シェンキェヴィチの『炎と剣』における 「クレスィ」の植民地的想像力

シモムラ アンナ

キーワード：ポーランド／植民地主義／ポストコロニアル研究／

ヘンリク・シェンキェヴィチ／クレスィ

本稿は、ヘンリク・シェンキェヴィチの歴史小説『炎と剣』を通して、ポーランドの両義的なポストコロニアル状況を考察する。支配と加害の歴史を併せ持つポーランドにおいて、「クレスィ」神話は国民的想像力を形成してきた。本稿では、ウクライナ人の表象と超自然的モチーフに着目し、同作に潜む植民的想像力とその矛盾を明らかにする。このような視点は、日本におけるポストコロニアル研究にも資するものでもあり、ナショナリズムなどの曖昧な遺産について省察を促す。

植民地化された植民者

東中欧地域は長らくポストコロニアル理論の視野外に置かれてきたが、過去十年でアイデンティティ政治や記憶の衝突に対する関心が高まっている。ポーランドでは、エヴァ・トンプソンの理論的試み（2000年）が議論を呼

び¹⁾、ダニエル・ボヴワ²⁾やマリア・ヤニオン³⁾の研究と共に同分野の基盤を築いた。一方でスノホフスカ＝ゴンザレスは、理論を実りある形で応用するには地域固有の複雑性——ユダヤ人共同体の周縁化、「クレシ」における植民地主義、そして下層階級に対する内部支配——を考慮すべきだと指摘する⁴⁾。こうした複雑な位置づけは、ポーランドが①被植民地、②植民地主義者、③西欧への憧憬という「三重の関係」の中にあることに集約される⁵⁾。

「クレシ・フスホドニエ (Kresy Wschodnie)」は、英語では一般的に「東方国境地帯 (eastern borderlands)」と訳されるが、より正確には「限界地帯」や「辺境」といった意味合いを持つ用語である。この語は、ブク川の東に位置する地域、すなわち現在の西ウクライナ、ベラルーシ、リトアニアに相当する領域を指している。戦間期に一時的に回復されるが、1945年に最終的に失われる。しかしこの地は、国家が地図上に存在しなかった時代と同様、ポーランド人の想像力の中で今なお特別な意味を持つ。「クレシ」は文学において美化された郷愁の空間として描かれ、英国にとってのインド、日本にとっての満洲のように、帝國的記憶との共鳴を見せている。

本稿では、上述したポーランドの植民地主義的アンビバレンスを、ポーランド出身のノーベル文学賞受賞作家(1905年)であり、19世紀末から20世紀初頭にかけて最も人気を誇った作家、ヘンリク・シェンキエヴィチ (Henryk Sienkiewicz, 1846-1916) の作品を通じて概観したい。シェンキエヴィチは、特に古代ローマを舞台とした歴史小説『クオ・ヴァディス』に

-
- 1) Thompson, E. (2000) *Imperial Knowledge: Russian Literature and Colonialism*, Greenwood Press
 - 2) Beauvois, D. (1994) “Mit „Kresów wschodnich”, czyli jak mu położyć kres”. *Polskie mity polityczne XIX i XX wieku*, Wydawnictwo Uniwersytetu Wrocławskiego, pp. 93-105
 - 3) Janion, M. (2017) *Niesamowita Słowiańszczyzna*, Wydawnictwo Literackie
 - 4) Snochowska-Gonzalez, C. (2012) “Post-Colonial Poland — On an Unavoidable Misuse” *East European Politics and Societies and Cultures*, 26(4), pp. 708-723
 - 5) Mayblin, L., A.Piekut, G. Valentine (2016) “‘Other’ Posts in ‘Other’ Places: Poland through a Postcolonial Lens?” *Sociology*, 50(1), pp. 60-76

よって、世界的に、また日本でも知られている（1907年以降、8種類の日本語訳が出版されている）。ポストコロニアルの観点から特に注目すべきは児童文学『W pustyni i w puszczy』（邦訳『砂漠を超えて』、横溝政八訳、1960年講談社）である。この小説は植民地時代のアフリカを舞台に、イギリスの帝國的使命を称賛しつつ、ポーランド人をヨーロッパ帝国主義の文脈に位置づける試みであった。三つの帝国によって征服・分割され、国家として消失したポーランドは、アフリカに海外植民地を持つという夢を抱いていたのである⁶⁾。

『砂漠を超えて』は、ポーランドが西洋の一部であることを主張する描写から始まる。ウッフエルマンは「この小説は、英国人とポーランド人、すなわちふたりの父親ローリンソンとタルコフスキ、そしてその子供たちである13歳のポーランド人少年スタシと8歳のイギリス人少女ネルとの無条件の連帯を描写する場面から始まる」と指摘する⁷⁾。旅の途中で、様々な国籍のヨーロッパ人が子どもたちを助け、「危険」とされるアフリカの風景の中に文明的な避難所を築く様子が描かれている。それに対して、アラブ人やスーダン人は一方的な悪役として描かれ、黒人を奴隷にし、スタシとネルを拘束する。スタシは黒人奴隷の被害者と協力するが、奴隷制度そのものは問われない⁸⁾。

『砂漠を超えて』は、ポーランドの長年の夢であった海外植民地の獲得を、

-
- 6) ポーランド戦間期の海洋・植民地主義的野心については Borkowska, G. (2007) “Polskie doświadczenie kolonialne” Teksty drugie, 4, pp. 15–24 を参照。1918年独立回復後、1924年に「河海同盟 (Liga Morska i Rzeczna)」が設立され、1930年には「海洋・植民地同盟 (Liga Morska i Kolonialna)」へ改称された。同盟は経済拡大や移民再定住を目的に海外領土獲得を目指し、雑誌『Morze (海)』などを通じて植民地主義を推進した。ボルコフスカは、帝国主義の犠牲者としての記憶と加害者の欲望との間のアンビバレンスを指摘し、旧ドイツ領カメルーンへの権利主張や、探検家ショルツ＝ログジンスキへの愛国的支持にその姿勢を見ている。
- 7) Uffelman, D. (2020) Polska literatura postkolonialna: od sarmatyzmu do migracji poakcesyjnej, Universitas, p.260
- 8) Ibid. p. 263

アフリカの象徴的な植民地化という形で実現する物語として読むことができる。クウォブツカは、シェンキエヴィチの若き主人公は、あらゆる場面でアフリカにポーランド性の刻印を残していると述べている⁹⁾。例えば、物語の終盤で、スタシは「ポーランドはまだ滅びていない、我々が生きている限り」と国歌の第一節を石に刻み、アフリカの地にポーランドの存在を象徴的に刻印する¹⁰⁾。

アフリカは、ポーランド独立をめぐるもう一つの象徴的な戦場となる。本作に見られる植民地主義的なジェスチャーは、ポーランド自身の被支配の歴史と帝國的征服への欲望とが、複雑かつ矛盾的に絡み合っている。独立を奪われたポーランドが、アフリカの被植民者ではなく、その支配者の視点に立って物語を構築している¹¹⁾。この視点は、物語の終盤でスタシが抱く幻想に最も端的に表れている。若さゆえの無邪気さと共に、彼は広大な土地を征服し、現地住民を文明化し、「新ポーランド」を建設し、さらにはアフリカ人で構成された軍隊を組織して、祖国ポーランドの支配者を打ち破るという夢を抱くのである。

また、『砂漠を超えて』にはシェンキエヴィチ自身の植民地支配に対する複雑な思いが垣間見える。物語の背景には、イギリス・エジプトによるスーダン支配に対するマフディーの反乱があるが、小説はこの反乱を通して帝国イデオロギーへの微かな批判を提示している。ポーランド 19 世紀の解放思想の継承者として描かれるスタシは、イギリスがスーダンを支配しようとする意図についてローリンソン氏に問いかける。これに対してローリンソンは、イギリスの支配は奴隷制の廃止をもたらし、現地住民を解放するものと説明する。この欺瞞的な理想主義の説明は、スタシの植民地主義への疑念を素早く封じ込め、彼の感受性を「子どもじみた」ものとして片付けてしま

9) Kłobucka, A. (2001) “Desert and Wilderness Revisited: Sienkiewicz’s Africa in the Polish National Imagination”, *The Slavic and East European Journal*, 45(2), p. 251

10) Uffermann, D. op. cit. p. 272

11) Kłobucka, A. op. cit. p. 247

う。この場面は、作品における批判的視点の限界を示すとともに、道徳的正当化の装いをまとった帝國的論理の再生産をも示している。

少年の主人公を通して物語内で示される植民地主義への正当な疑問も、結局は物語のナラティブによって否定されてしまう。エピローグでは、マフディーの国がイギリスの支配下に入ったことが語られ、鉄道や蒸気船、キリスト教の宣教師、そして何よりも「待望の調和」がもたらされたとされる。ここには、マフディーの反乱が近代化に背を向けた「野蛮な群衆」による暴動として描かれており、彼らの抵抗を解放運動として捉える視点は見られない¹²⁾。

シェンキェヴィチが想像した「多文化的クレシ」

しかし、ポーランドの植民地主義的な罪は、『砂漠を越えて』に表れるような「白人の夢」を反映した言説の領域にとどまるものではない。すでに述べたように、ポーランドには「クレシ」と呼ばれる地域における積極的な植民化の歴史が存在する。プイニツキの言葉を借りれば、シェンキェヴィチはポーランドの「クレシ神話」の主要な「編纂者 (codifier)」とされている¹³⁾。ポーランドにおけるシェンキェヴィチの人気は、主に歴史冒険小説に由来しており、国家がヨーロッパの地図から消滅していた時期において、「心を慰め」、愛国心を育むための文学として機能していた。シェンキェヴィチの三部作『炎と剣 (Ogniem i mieczem)』(1885)、『大洪水 (Potop)』(1886)、『パン・ヴォウォディヨフスキ (Pan Wołodyjowski)』(1888)は、過去の勝利を讃えると同時に、「クレシ」という空間にロマン主義的なイメージを与え、それをポーランドの失われた栄光の象徴として定着させた。『三部作』は、ポーランド・リトアニア共和国の黄金期 (1647～1673年)を

12) Cichoń, A. (2004) „W kręgu zagadnień literatury kolonialnej - W pustyni i w puszczy Henryka Sienkiewicza” *Er(r)go. Teoria - Literatura - Kultura*, 8, p. 104

13) Bujnicki, T. (2008) op. cit. p. 218

揺るがした戦争の数々を描いた歴史冒険サーガであり、分割時代におけるポーランドの国民的アイデンティティの結晶化に多大な影響を与えた作品である。特に『三部作』の第一部と第三部において、「クレシィ」は重要な「登場人物」のひとつとして位置づけられ、ポーランド・リトアニア共和国の領土拡大の絶頂期を象徴する存在として描かれている。

ポーランド人の想像力において、「クレシィ」は冒険と自由の領域であり、しばしば広大で未開のフロンティアとして描かれる。多くのポーランド人にとって、「クレシィ」はポーランド的アイデンティティの精髓を象徴する場所であり、文明化されていない草原に対して貴族の館がそびえ立つ風景は、ポーランド文化の最高表現と見なされた。この神話は、ポーランドの支配を「文明の使命」として正当化し、「空白の地」にヨーロッパ的価値と進歩をもたらす行為として描いている。

「クレシィ神話」の重要な構成要素のひとつは、シェンキエヴィチの作品でも特に強調されている「多文化主義」の神話である。バクワは、「クレシィ研究」において「多文化主義」という言葉がいかに戦略的に用いられているかを指摘している。「〈境界地帯〉を少しでも扱う文学理論や文化理論の著作で、〈多文化主義〉という言葉が出てこないものはほぼ存在しない。しかし、実際に多言語、歴史、慣習を理解し、他者の視点を考慮しながら、多文化主義そのものを正確な研究対象とした著作もまた、ほとんど存在しない。」¹⁴⁾ この非対称性には極めて単純な理由がある。すなわち、「クレシィ」という概念はポーランド人によって作られ、ポーランド人のために語られてきたものであり、その「多文化性」を構成する他の諸民族は、周縁に追いやられるポーランド中心主義的な発想を拒絶しているのである。共和国の「文化的多様性」の描写は、『炎と剣』に以下のような場面に表れている。

さまざまな衣装とさまざまな色彩。異なる軍旗の下に集う兵士たち、

14) Bakula, B. (2014) "Colonial and Postcolonial Aspects of Polish Borderland Studies: An Outline" Teksty Drugie, Special Issue – English Edition, 1, 2014, p. 114

(省略) 黒いマントを羽織ったユダヤ人たち、農民。紫の帽子をかぶったアルメニア人、毛皮の上着を着たタタール人。ありとあらゆる言語、呼びかけ、罵り言葉、子供の泣き声、犬の吠え声、牛の鳴き声が入り混じっていた。これらの群衆は、近づいてくる軍旗を喜びをもって迎えた。なぜならそこに保護と救済の確かさを見ていたからである。(拙訳、347頁)¹⁵⁾

このように、ポーランド人、リトアニア人、ベラルーシ人、ウクライナ人、ユダヤ人、そしてポーランド・タタール人を包摂する、慈悲深く多民族を保護する「諸民族の母」としての共和国という発想は、シェンキエヴィチの作品にたびたび登場するテーマである。

この「調和」は、その後、「同胞同士」の戦争によって破壊される。小説が提示する中心的な教訓は、コサックの蜂起によって国家が弱体化したという点である。コサックは、現在のウクライナに相当する地域に居住していた半遊牧民であり、やがてウクライナ社会における支配層・知識人階級を形成するようになった。彼らはポーランド・リトアニア共和国において部分的にエリートとして認められていたが、次第にシュラフタ（ポーランド貴族）中心の階層構造に不満を抱くようになった。シュラフタと同等の権利を求めるコサックの要求はたびたび退けられ、最終的にクリミア・タタール人や、シュラフタの支配に苦しんでいたウクライナ農民と連携し、ポーランドの支配に対して蜂起する「フメリニツキーの乱」へと発展した。

『炎と剣』において、コサックの反乱は、ポーランド人とウクライナ人の双方に災厄をもたらした悲劇として描かれている。ウクライナ人はシュラフタの支配からは解放されたものの、今度はクリミア・タタールの手に落ちることになる。「タタールの轡（くびき）」という表現は、当時検閲のために直接言及できなかったロシア帝国の支配を暗示している。小説の中でシェン

15) Sienkiewicz, H. (2018) *Ogniem i mieczem*, Bellona

キエヴィチは、誰もが自らの言語を話し、信仰を守ることができた自由な土地として「クレスィ」のロマン的なビジョンを提示している。

しかしながら、シェンキエヴィチが描く「ポーランド＝ウクライナの家族」という視点は、明らかに特権的な立場からのものであり、かつての共和国を支えていた不公平な階級および民族的ヒエラルキーを無視している。チェモダノヴァは、シェンキエヴィチの小説に対するウクライナ側の受容を分析した論文の中で、作中にはウクライナ人が自らの言語や文化、土地を享受しながらポーランド人やリトアニア人と「祖国」を分かち合う多民族国家の魅力的なヴィジョンが描かれているものの、19世紀末のウクライナ人にとってその構想はすでに時代遅れであったと指摘している¹⁶⁾。『炎と剣』においてシェンキエヴィチは、コサックを共和国の敵、脅威として描いているが、ウクライナ人にとって彼らはウクライナ民族アイデンティティの祖である。シェンキエヴィチがボフダン・フメリニツキーを、共和国を滅ぼした悪役であり、タタール人と手を組んでキリスト教信仰を裏切った人物として描く一方で、ウクライナにおいて彼は、不当なポーランド支配に立ち向かい、やがて独立したウクライナ国家へと至る道を切り開いた国民的英雄とされている。ウクライナ側からの批判的な声は、1885年の小説出版直後から上がっていた。中でも最も厳しい批評のひとつは、ウクライナの歴史家ヴォロディミル・アントノヴィチ（Володимир Антонович）によるものであった。彼は、シェンキエヴィチがコサックを極めて否定的に描き、ウクライナ農民を野蛮で貪欲な大衆として見下していると非難した。

「多文化主義の神話」は、「クレスィ」にまつわるもうひとつの神話的イメージと結びついているが、それは同時にこの神話を内側から掘り崩すものである——すなわち、「対立の地」としての「クレスィ」である。「多様な民族が平和に共存する理想郷」としての「クレスィ」は、同時に、戦い、廃

16) Chemodanova, O. (2014) “Z dziejów ukraińskiej recepcji *Ogniem i mieczem* Henryka Sienkiewicza” *Wiek XIX. Rocznik Towarzystwa Literackiego im. Adama Mickiewicza*: Rok VII, 49, p. 249

墟、そして孤独な墓が連なる「争いの地」としても想像されてきた。リッツは次のように書いている。「ポーランドのウクライナに関する文学は、ロマン主義の時代から近代史、特に 18 世紀の民族虐殺に近い大虐殺の時代を追いながら、多民族の共存を“ユートピア”や“神話”の中でさえ解決不可能な問題として描いてきた」¹⁷⁾。『炎と剣』には次のような描写がある。

そこでいくつの戦があったか、どれほどの人々が倒れたか、誰にも数えられず、誰にも記憶されていない。知っているのは、鷲や鷹や烏だけ。遠くから翼のざわめきや烏の鳴き声が聞こえてきた者、あるいは鳥たちが一つの場所の上を旋回しているのを目にした者は、そこに死体や埋葬されぬ骨が転がっていると知ったのである。(拙訳、8 頁)

「クレシ」の草原は、現実では不可能だった独立闘争が象徴的に展開される、ポーランドの独立への願望を託した空想の空間となったのである。

オリエンタルな超自然

『炎と剣』において、自然がいかに超自然的な現象のゆりかごとなるかについては、すでにピエホタ¹⁸⁾ やバシンスカ¹⁹⁾ によって論じられている。実際、シェンキェヴィチはこの作品において、写実主義の枠組みを大きく超えており、ピエホタはこの小説を「スラヴ的ファンタジー・ジャンルの予兆」

17) Ritz, G. (2008) “Kresy polskie w perspektywie postkolonialnej”. (Nie)obecność: pominięcia i przemilczenia w narracjach XX wieku, ELIPSA, p. 117

18) Piechota, D. (2017) “Ogniem i mieczem Henryka Sienkiewicza jako prefiguracja fantazy słowiańskiej”. Filologia Polska. Roczniki Naukowe Uniwersytetu Zielonogórskiego, 3, pp. 287-300

19) Basińska, M. (2019) “Elementy słowiańskiej wiary i kultury w Ogniem i mieczem Henryka Sienkiewicza”. Litteraria Copernicana, 3(31), pp. 125-136

として分析している²⁰⁾。幻想文学は社会的・文化的変動期に特に読者の欲求に応えやすく、ポーランドでは19世紀末の国家的危機の中で、シェンキェヴィチの『炎と剣』のような作品が過去を神話化し、国民的アイデンティティと誇りを支える役割を果たした。この傾向は、アーサー王伝説を通じてファンタジーを築いたヴィクトリア朝イギリスや、ケルト神話を再発見した1880年代のアイルランドとも共鳴する。

ポーランドにおいて、ロマン主義の時代には、古代スラヴ文化への関心が再燃した。この文化は、かつてキリスト教化の過程で、とりわけ残酷かつ徹底的な形で抑圧されていた。マリア・ヤニオンによれば、こうした祖先神話や忘れ去られた伝統への回帰は、抑圧された記憶の回復として機能し、外国による支配の脅威にさらされるなかで、自民族固有の文化遺産に根ざした帰属の物語を構築しようとする試みであった²¹⁾。しかし、ポーランド文化におけるスラヴ的遺産は乏しく、そのためポーランドのロマン主義者たちは、ルーシ（ウクライナおよびベラルーシ）の民俗文化に大きく依拠し、それをしばしば自らの国民文化の延長として取り込んだ²²⁾。ルーシの文化要素は、加工され中和されたうえで、疲弊したポーランド文学の正典に新鮮さをもたらすものと見なされた²³⁾。本稿の最終部分では、ヤニオンの「抑圧されたスラヴ世界」という概念と、ウクライナ民俗のポーランドによる取り込みを手がかりに、シェンキェヴィチの小説の主要なテーマのひとつであるポーランド人とウクライナ人の「親族関係」観、そして「クレスィ」に潜む植民地主義的なアンビバレンスについて論じたい。

『炎と剣』は、自然の描写から始まり、迫り来る破滅の気配——いわゆる「内戦」の予兆——を喚起するような雰囲気醸し出している。「1647年は

20) Piechota, D. op. cit. p. 290

21) Janion, M. op. cit.

22) Rudaś-Grodzka, M. (2013) *Sfinks słowiański i mumia polska*, Instytut Badań Literackich PAN, p. 169

23) Ibid. p. 189

奇妙な年であった。天地にさまざまな兆しが現れ、何らかの災厄や異常な出来事を予感させた。(省略) 春にはバツタが「荒野」からかつてないほどの数で飛び出し、作物と草を食い荒らしたが、それはタートル人の襲撃の予告でもあった。夏には大きな日食が起こり、まもなく空に彗星が現れた」(8、拙訳)。この箇所では、人々が自然現象を不吉な予兆として解釈している。しかし物語が東へ進むにつれ、草原からはより直接的な超自然的要素が出現するようになる²⁴⁾。

物語の冒頭からすでに、次のような描写が登場する。

夜が砂漠に降り、幽霊の刻がやってきた。あの時代、砦で見張りに立っていた騎士たちは語り合った——荒野では、罪を背負ったまま突然死を遂げた戦死者たちの影が夜な夜な立ち上がり、十字架や教会の存在など意に介さず、自らの輪舞を繰り広げている、と。

そのため、砦では死者のための祈りが唱えられた。また人々はこうも言った——それらの影の騎馬たちは、砂漠をさまよいながら旅人の道をふさぎ、呻き声をあげて「聖なる十字の印を」と懇願してくるのだと。その中には、生者を追いかけて遠吠えするウピオール〔亡霊〕も交じっており、熟練の耳を持つ者であれば、遠くからでもそれがオオカミの声ではなく、亡霊の叫びであると聞き分けることができた。(拙訳、9頁)

『三部作』における、ロマン派詩人たち、特に「クレシィ」と深い関わりを持ったユリウシュ・スウォヴァツキの影響については、これまでに多くの研究がなされてきた²⁵⁾。上記の一節は、アダム・ミツキエヴィチの『祖霊祭 (Dziady)』を想起させる²⁶⁾。そこには、天国に行けず、生者と死者の世界の

24) Piechota, D. op. cit. p. 290

25) とりわけ Bujnicki, T. (2007) “Romantyczny obraz Ukrainy a historyczna wizja w *Ogniem i mieczem*”. *Po co Sienkiewicz?*, OBTPE, pp. 252–270

26) Piechota, D. op. cit. p. 290

あいだをさまよう罪人たちの亡霊や妖怪が登場する。ピエホタは、ファンタジーというジャンルにおいては世界が二つに分断されると述べている——すなわち、聖なる領域 (sacrum) と俗なる領域 (profanum) である。シェンキエヴィチの小説において、ポーランドは前者、ウクライナは後者に属する。ピエホタによれば、シェンキエヴィチのファンタジー小説ではウクライナは周縁的で野蛮化した「俗」の空間として位置づけられ、悪がそこから発生する。物語世界は善と悪の闘争として構成され、悪の力は国境を越えて共和国全体に広がり、その影響は自然界の異常として表象される²⁷⁾。

本稿で筆者が明らかにしたいのは、ピエホタやバシンスカによる『炎と剣』における超自然的要素およびスラヴ民俗伝承に関する研究において見落とされている点である。それは、超自然が主にウクライナ人の登場人物に付随して描かれており、そのことがオリエンタリズムの手段として機能しているという事実である。

確かに、ポーランド人の登場人物も「闇の力」の存在を感じ、恐れている。上に引用した場面では、ポーランドの騎士たちが、他の騎士たちから聞いた幽霊譚を語り合っている。しかし、こうした怪異はあくまで匿名の人物による伝聞として描かれており、物語の主要人物——特に視点人物であるスクシェトゥスキ (Skrzetuski) ——は、物語の中で超自然的な出来事を現実として経験することはない。むしろ、ポーランド人の登場人物たちの恐れという感情が周囲のウクライナの風景に刻み込まれる形で描かれている。

丘全体が生氣を帯び、さまざまな声で呼びかけてくるようだった。岩陰からは、高くて暗い影がこちらをうかがっているように見え、奇妙な形をした影が岩の間を音もなくすり抜けていった。遠くの闇の中には、狼の目のように光るいくつかの灯りがちらちらと見えた。ついには、丘のもう一方の端、最も密集した岩塊と崩れた瓦礫の間から、低く喉を鳴ら

27) Ibid. 292

すような遠吠えが響き、それにすぐさま他の声が呼応した。(拙訳、496頁)

この描写は不気味であるが、奇妙な声や影は野生動物としても解釈可能であり、ここでは自然そのものが文明の「他者」として描かれている。ポーランド人の登場人物たちが幽霊や怪異の存在を信じている可能性はあるにせよ、語り手は超自然的現象を実際に体験したとは一度も述べていない。

それに対し、「本物の魔術」を行使するのはウクライナ人の登場人物である。物語における最も重要な超自然的存在は、ウクライナ人の魔女・ホルピナ (Horpyna) である。彼女は「悪魔の妹」と呼ばれ、予言能力を持ち、主人公スクシェトゥスキの敵役であるコサック・ボフン (Bohun) を呪術によって助ける。また、魔女たちはフメリニツキーの側近としても登場し、彼が共和国軍に勝利するための助言を求める場面もある。

一方、ポーランド人の登場人物で超自然との「個人的関係」を持つのはザグウォバ (Zagłoba) のみである。彼は「アジアで魔女から魔術を学んだ」と語る (432、拙訳)。しかし、ザグウォバは典型的なシュラフタ文化の誇張された欠点を体現するユーモラスなキャラクターであり、彼の言動は基本的に真剣には受け取られていない。この「魔女」の話も、仲間たちに語る作り話の一つとして扱われている。

この最後の例は、『炎と剣』において超自然が明確に「オリент」と結びついていることを示している。ポーランド人の登場人物たちが超自然と直接関わる場面は、スクシェトゥスキの恋人ヘレナを魔女の隠れ家から救出する際に限られるが、それもウクライナ人の登場人物を媒介として経験される。それでもなお、ポーランド人の主要人物たちは、魔女の魔術そのものが実演される場面に立ち会うわけではない。

彼女の力を実際に信じているのは、スクシェトゥスキの従者である若きジェンジャン (Rzędzian) である。彼は非常に迷信深く、幽霊を極端に恐れる性格として描かれており、ホルピナの力を真に受けて恐れている人物であ

る。ホルピナは、彼によって聖水に浸された弾丸で射殺されるが、ここで重要なのは、ホルピナは剣ではなく銃によって放たれたという点である。銃は技術的な発明品であり、この場面は善が悪に勝利するだけでなく、「科学が迷信に打ち勝つ」瞬間としても読める。

フメリニツキーの例も、彼の主要な敵であるヴィシニョヴィエツキ (Wiśniowiecki) 公との対比において、迷信に支配された「野蛮な」性質を強調するものとなっている。この二人の敵対者——いずれも超人的存在として描かれている²⁸⁾——は、あたかも表裏一体の存在のようである。ヴィシニョヴィエツキは理性的で、冷静沈着、謙虚で敬虔な指導者として描かれているのに対し、フメリニツキーはその反対として、衝動的で、酒に溺れ、「サタン」と手を組む（ここでの「サタン」とは、ムスリムとの同盟であり、また超自然的な力との関係も暗示されている）暴れ者、または「反キリスト」である。

一方で、ヴィシニョヴィエツキはウクライナ人たちの目には神格化された存在としても映っている。

コサックの陣営ではヴィシニョヴィエツキについての歌が歌われたり、若い戦士たちを震え上がらせるような話が囁かれていた。曰く、彼は夜になると塹壕に姿を現し、みるみるうちに巨大化して、その頭は塔よりも高く届くという。彼の目はまるで二つの月のように輝き、その手に握られた剣は、神が時折人類に災いをもたらすために天に送り込む、不吉な星のごとくとも語られた。また、彼が一声叫ぶと、戦で倒れた騎士たちが甲冑をきしませながら蘇り、生者とともに隊列を組むという話もあった。（拙訳、845頁）

このように、ウクライナ人たちはまるで戦の神を崇拝するかのように、迷信

28) Bujnicki, T. (2007) op. cit. p. 265

深く異教的な様式でヴィシニョヴィエツキを描いている。そして同時に、彼らは敵の指導者を自らの指導者以上に崇めるかのような描写もなされている。「そうした会話、憎悪、そして迷信的な恐怖の中には、あの草原の民が自らの血塗られた破壊者を愛するという、何か野性的な愛情が潜んでいた。そうなのだ！ フメリニツキーは、ハンヤタール人の目だけでなく、自分自身の民の目においてすら、彼の前では色褪せてしまった」（同上）。被植民者が、表面上は憎みながらも、内心では植民者の権威や力を渴望し、ひそかに敬愛するという構図は、植民地主義文学において典型的なモチーフである。

このような描写と比較すると、ポーランド人の登場人物たちはより「理性的」に描かれており、超自然的な領域から一定の距離を保っているように見える。シェンキエヴィチが綿密に研究したとされるスラヴ固有の民俗伝承は、本来ポーランド人とウクライナ人が共有する文化である。彼がこの要素を物語に導入したのは、両民族を統合するための手段として意図された可能性がある。スラヴ文化は共通の根源、すなわち「ルーツ」の象徴であった。

ミツキエヴィチやスウォヴァツキの作品に見られるように、失われたスラヴ神話はしばしば亡霊、幽霊、吸血鬼といった不気味な形をとって再登場し、墓や塚、死のイメージの蔓延とともに、辱められた祖先との再接続を切望する狂氣的な表現となる。こうした「抑圧されたスラヴ世界」は、しかしながら、物語の中ではウクライナ、すなわち「東方」の側においてのみ、完全な形で顕在化する。ウクライナ人は魔女や亡霊を信じるのが「許されている」が、それは彼らがオリエンタルとして描かれているからである。一方、ポーランド人は、シェンキエヴィチの理解においては、より進歩した「西洋的」文明の担い手として描かれており、理性を重視する側に属している。シェンキエヴィチ自身が実証主義者であったことを考慮すれば、この対比は当然のこととも言える。ゆえに筆者は、シェンキエヴィチの実証主義的性格はポーランド人の登場人物に反映されており、一方で抑圧されたロマン主義的な非合理性は「東の辺境」に属するウクライナ人の登場人物を通して

のみ物語の中に噴出する、と主張したい。

ウクライナ人との共通のルーツ——この共有された亡霊——は、ポーランドによる植民地主義的言説を支える要素の一つとなっている。それは、構築された植民地的差異を覆い隠すためのカモフラージュでありながら、同時に接続点としても、分離の手段としても機能している。この構造は、進化論的な連続体としても読み取ることができ、ウクライナ人が「共有された過去」を体現し、ポーランド人が「進化の到達点」として位置づけられるのである。

これはまた、「クレスイ」にまつわる神話の一つ——すなわち、多文化的共存の理想郷という神話——の変奏とも捉えることができる。しかしながら、この理想は物語の中で描かれる苛烈な暴力描写によって明確に掘り崩されていく。暴力は確かに両陣営に存在するが、特にコサック側において顕著である。ウクライナのステップは *profanum* の空間として極めて危険な場所であり、それは幽霊や魔物のせいではなく、「人間」の存在ゆえにそうである。次に紹介するのは、反乱軍のコサック陣営によって行われた処刑の場面である。

数千人もの群衆が罪人たちに襲いかかり、叫び声を上げながら、互いに犠牲者へ近づこうと争い合い、彼らの体を引き裂いた。足で踏みつけ、肉片を引きちぎり、狂乱した群衆がけいれんするように押し寄せていた。時折、血に染まった手が、もはや人間とは判別できない二つの塊を高々と掲げ、また地面に投げ捨てた。遠くから見ていた者たちは怒号を上げた——犠牲者を水に投げ込めという者もいれば、燃え上がるタールの樽に押し込めろという者もいた。酔っ払いたちは互いに喧嘩を始めた。狂気の果てに、二つのウォッカの樽に火が放たれ、その震える青白い光がこの地獄のような光景を照らし出した。空には、静かで明るく穏やかな月が、この一部始終を見下ろしていた。(拙訳、164-165頁)

この「地獄のような光景」は、その凄惨さが、あまりにも穏やかな月の静けさと対比されることで、まるでサディスティックな印象さえ与える。シェンキエヴィチの小説が伝えようとする主なメッセージは、彼が内戦として描いたコサックの反乱が、ポーランド人とウクライナ人の双方にとって深い悲劇であったという点にある。この想いは、ポーランド人の「心を慰める」ために書かれたとされる三部作の目的とは裏腹に、驚くほどペシミスティックな本作の結末において、強く表現されている。「共和国は荒れ果て、ウクライナもまた荒れ果てた。かつて栄えた都市の廃墟に狼が遠吠えし、かつて花開いていた地は、まるで巨大な墓場のようにであった。憎しみは人々の心に深く根付き、兄弟の血を毒した」(940、拙訳)。廃墟と墓のイメージは、「失われた楽園」のイメージを再び喚起するものである。「喪失」がポーランドの失われた独立の隠喩であることは言うまでもない。

以上を踏まえると、『炎と剣』は「クレスィ」を魔力的に魅力的でありながらも階層的な空間として構築している。ウクライナの民俗文化は美的に取り込まれる一方、その担い手は非理的で危険な存在として描かれる。この「多文化の過去」の神話は、実際には象徴的支配の構造を覆い隠すものであり、他者性を審美化しつつ従属させているのである。したがって本作におけるポーランド人とウクライナ人の共存は、多様性の賛美ではなく、非対称性を自然化し、過去の衝突を歴史ロマンスの安全な枠に封じ込める文学的戦略として現れている。

結論

ポストコロニアル理論の視点からヘンリク・シェンキエヴィチを読み直すことは、ポーランドが「被植民地」と「植民者」の双方として抱える複雑なアイデンティティの絡まりを浮かび上がらせる。シェンキエヴィチの作品は、帝国の支配下で苦しむ国民を慰めることを目的として書かれたが、同時に植民者の視点から、東方の「辺境」を構築し、美化している。『炎と剣』

におけるウクライナ人の描写、とりわけ超自然的モチーフを通じた表象は、ポーランドの国民的想像力に潜む植民地主義的傾向——すなわち、領土拡張、文明的優越、歴史的使命といった幻想の投影——を露わにする。

シェンキエヴィチの文学は、他の植民地文学と同様に神話化や象徴的支配の構造に加担している。多文化的でありながら階層的な共和国像、悲劇として描かれるコサックの反乱、楽園であり墓場でもある「草原」への執着——これらはポーランドの植民地主義的郷愁に潜む緊張を浮かび上がらせる。本論が示したように、こうした視点は日本における帝国主義の比較研究にも通じ、ナショナリズムや文明言説の曖昧な遺産に対する広範な省察を促すものである。

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

Colonial imagination in Henryk Sienkiewicz's *With Fire and Sword*

Anna SHIMOMURA

This paper examines the ambivalent postcolonial condition of Poland through a reading of Henryk Sienkiewicz's historical novel *Ogniem i mieczem* (With Fire and Sword, 1884). While Polish national memory often emphasizes its historical experience of foreign domination by Prussia, Austria, and Russia, it tends to overlook its own colonial ambitions, particularly in the eastern borderlands known as "Kresy"—a region encompassing present-day western Ukraine, Belarus, and Lithuania. Long idealized in Polish literature as a romantic and heroic frontier, Kresy has served as a key site for the construction of national identity, often through orientalist and civilizational tropes.

By analyzing *Ogniem i mieczem*, which portrays Polish nobles as heroic defenders of civilization and depicts Cossacks as barbaric "others," this study reveals how literary narratives contributed to the mythologization of "Kresy" and the reproduction of colonial hierarchies. Special attention is given to the role of the supernatural and the myth of multiculturalism in obscuring the violence inherent in Poland's eastern expansion. Through this case study, the paper demonstrates how postcolonial theory can offer critical tools for reinterpreting East-Central Europe's complex historical entanglements—where victimhood and agency, subjugation and domination, coexist in a uniquely layered form.

Importantly, this study also represents the first attempt within Japanese-language scholarship to apply a postcolonial lens to Sienkiewicz's work, thereby opening new avenues for dialogue between Polish and Japanese perspectives on empire, identity, and historical memory.